

社会(地域・福祉・企業の連携システム)が支える、  
学校教育終了後から生涯にわたる  
継続的な学びの実践研究事業

～コミュニケーション経験を基盤とする生活・就労支援プログラムの構築～

## 報告書

Z o k u  
継続  
18  
OVER

NPO 法人障がい児・者の学びを保障する会

とにかく時差がすごかった。時差ぼけがすごい。  
朝なのか夜なのか、わからなくなる感じでした。

それからいろんな所へいきましたね。  
とくに最後の食事は、夕食も朝食も、とにかく心から味わって食べました。  
ホテルもサイコーでした。

あとは、大学に行きました。  
ロンドン大学も、オックスフォード大学にも。  
あこがれの大学でした。今日も天理大学です。  
いろんな人という話しました。

それからまだあります。  
ぼくはモアねりで学んでいます。自分の生活にかんすることです。  
月1回調理実習をしています。音楽、レクリエーション、春日町青少年館でスポーツもしています。  
ほかにも、生きる、はたらく。この間は職場見学にいきましたね。  
自主学習もしています。課外活動で、羽田空港とか浅草にいたり、おもしろいです。  
レクでは、トランプとかウノとかジェンガとか、フルーツバスケットがなんでもバスケットになって。  
ぼくは狙われないように、洋服を選んでは。  
例えば、「ミッキーの洋服着ているひと」とか言われないように注意して。  
名前を言うのは禁止です。

それと、まだある。  
お好み焼きですね、「しゅんしゅんのお好み焼き屋さん」i-LDKで8月にやりました。  
あれはサイコーでした。  
たくさんの方が来てくれたんですよ、20人くらいかな。  
ぼくは普段から家でつくってますので。  
みんなに喜んでもらえてサイコーでしたね。

今度はクレープをやりたいよね。  
焼いたらすぐ冷蔵庫で冷やせばいけると思う。

趣味は道路の設計図を描くことですね。  
東京の高速道路を描いています。  
笠原さんのお子さんにプレゼントしました。  
次は阪神高速道路を描きたいですね。

ちょっと長くなって、まとまらない話をしてしまって、申し訳ありませんでした。  
以上です。ありがとうございました。

(「しゅんしゅんのお好み焼き屋さん」天理大学学長室での懇談にて)

社会（地域・福祉・企業の連携システム）が支える、  
学校教育終了後から生涯にわたる継続的な学びの実践研究事業  
～コミュニケーション経験を基盤とする生活・就労支援プログラムの構築～  
報 告 書

# 続 z o k u

NPO 法人障がい児・者の学びを保障する会

- 1 ..... もくじ
- 2 ..... 「学びとコミュニケーション」について
- 3 ..... 「学びのレディネス」を整える
- 4 ..... 事業カレンダー
- 5 ..... OPEN 講座
- 11 ..... CLOSED 講座
  
- 14 ..... コラム  
      学びの結果えられるものは「正解」  
      ではなく「問い」である／坂本文武
- 15 ..... 実践に反映させた事例集
- 19 ..... 超大学
- 21 ..... 地域内連携
- 25 ..... おわりに
- 26 ..... 成果報告会

## 「学びとコミュニケーション」について

当事業では、障がいのある人たちの暮らしが限定的な人間関係の中にあることや、「支援される人」として固定化された立場でのかわりが多いことを鑑みて、「学びとコミュニケーション」を軸に、以下のように取り組みをすすめました。

コミュニケーションの中からの学び

障がいのあるなしに関係なく、特に大人になってからの「学び」は、さまざまな場面での多様な形の「コミュニケーション」を通じて得られることが多い。

人と出会い、  
多様なコミュニケーション機会

「コミュニケーション」は、さまざまな人と出会う機会により広がっていき、さらに、「支援される人」などに固定化されない多様な立場でのかわりにより深めることができる。

## 学びの場をつくる時に考えること

- 安心、安全を感じられる環境になっているか？
- 参加者が自分以外の人を信頼できているか？
- 参加者ひとりひとりが「自分」を持っているか？
- 移動や経済面でのバリアをクリアできているか？
- 学びの場の中も外も人間関係が広がっていきと想定しているか？
- 日常のつづやきをひろえているか？

## プログラムをつくる時のポイント

- フットワークを軽くどこにでも行く
- 時事ネタを使う
- 先回りして「難しい」「やさしい」を決めつけない
- 生活と仕事を切り分けずに捉える
- 学びと生きること、暮らすことをつなげる
- 心が動くことを前提にする
- 人ととの交わりをつくる
- 想定外の展開になったらチャンス！
- ホンモノにこだわる
- わかりやすさと質の高さの両方をよくばる
- つねにアップデートをめざし、試行錯誤し続ける

## 「学びのレディネス」を整える

昨年度の実践研究事業に参加した当事者に以下のような姿が見られた。

- ◎ 「障がい」を理由に、自分がやりたいことを諦めたり制限したりする姿。  
▶▶ 様々なことをあきらめた(あきらめさせられた)時、「障がい」を理由にされてきた？
- ◎ 自分の中で、できないことばかりが際立ち、劣等感でいっぱいになっている姿。  
▶▶ 他者(特に健常者)との比較の中に生き、自己肯定感を獲得できていない？
- ◎ 失敗を恐れ、新しいことに消極的でなかなかチャレンジできない姿。  
▶▶ 失敗することにペナルティを与えられたり、怒られる経験をしてきた？
- ◎ 自分がどう感じているかわからず、常に人に判断をゆだねる姿。  
▶▶ 自分で考え、自分で決め、自分なりにやってみる、という経験が不足している？
- ◎ わからないことを人に聞いたり、こまったときに人に助けを求めたりできない。  
▶▶ 「自立＝何でも自分でできるようになる」と教えられ、人に支援を求めることを良しとできない？

その他、読み書き、計算、移動、コミュニケーションなど、様々な点において経験不足がある…

障がいのある人たちが、上記のような「学びのレディネス」の不足に陥っていることは少なくない。学びの場づくりにおける「学びのレディネス」を整えるためには、個々の生いたちや社会的背景を知り、個別に関わることが必要となる。

障がいのある人たちは、幼少の頃から所属できるコミュニティが限定的である。結果、かかわる人や立場が固定化され、多様なコミュニケーションに触れる機会が少なくなる。プログラムには、何がテーマであったとしても、人との関係性の育みを常に意識してつくる必要がある。

具体的には、十分過ぎるくらい余裕を持った時間設定をし、感じて、考えて、表現する“間”を持てる、時間外での対応ができるなどの準備しておくこと。それが保障されれば、誰にでもどんな状況でも学びが生まれる。

ことばの理解が未熟である可能性を考え、仮に場や流れにそぐわない発言や、不適切とされる言葉を使ったとしても、それらを言葉通りに受け止めず、見えづらくなっている思いを読み解く姿勢が大切である。

自力での移動ができない場合の手立てや、経済的困難な状況にある場合の参加費設定など、個別的に考慮することにより、「参加したいけれど参加できない」という事態を回避できる。

場づくりにおいて、「失敗」を「学びにつながる一歩」と肯定的に捉え直すことはとても重要である。個別に、ときには仲間とともに話し合いながら、「失敗」を「学び」に変えていくことを重ね、当事者が安心して、迷い、考え、自由に発言し、行動できる場づくりを心掛ける。安全だと認識できる場で、自分なりに試行錯誤することで、自信が付き、学びの効果も向上する。

また、こうした場で人を信頼することができるようになれば、それぞれの日常生活において、人とのコミュニケーションのハードルが低くなり、そこからの学びを得るといって、波及的な学びの拡がりも想定できる。

### レディネス [readiness]

人の心身が発達し、学習する際の基礎条件となる一定の知識、経験、身体などができあがっている状態 (goo 辞書)

## 事業カレンダー

	ワーキンググループ	OPEN講座	CLOSED講座	超大学 (連携協議会)	成果報告会
7月 7日		おしゃべりなからだ 会話する音			
21日			わたしのトリセツ①		
8月 1日	交流活動	プログラム名 練馬区ユニバーサルデザイン教室 主催 練馬区福祉部管理課 開催地 練馬区			
2日	活動プレゼン	プログラム名 練馬区教育委員会夏季集中講座 講師 主催 練馬区教育委員会 開催地 練馬区			
7日	ワーキンググループ①				
9月 4日				超大学 (静岡 大学編)	
7日-12日	活動プレゼン	プログラム名 イギリス交流研究 開催地 オックスフォード大学 オープンユニバーシティ大学			
14日			わたしのトリセツ②		
29日		科学実験教室			
10月 6日			わたしのトリセツ③		
7日	ワーキンググループ②				
20日		ベガーボール体験会ボランティア			
24日 31日	活動プレゼン	プログラム名 大田区区民大学 主催 大田区地域力推進課 開催地 大田区			
11月 1日-5日	活動プレゼン	プログラム名 イギリス交流研究 開催地 天理大学他			
15日				意見交換会	
17日			リアルおままごと①		
17日			わたしのトリセツ④		
12月 1日		おにぎりワークショップ			
5日 6日	活動プレゼン	プログラム名 東北ブロックコンファレンス 主催 秋田県教育委員会 開催地 秋田県秋田市			
8日			リアルおままごと②		
10日				超大学 (企業 関係者編)	
1月 5日			リアルおままごと③		
6日	ワーキンググループ③				
18日		選挙			
19日			リアルおままごと④		
19日			わたしのトリセツ⑤		
2月 1日		つながるフェスタ			
5日					成果報告会

# OPEN 講座

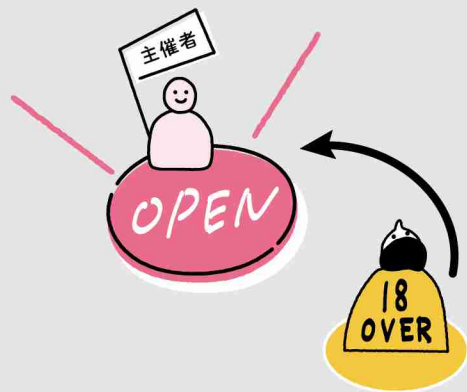
さまざまな人との  
コミュニケーション機会の創出と、  
その中での学びを誘発するため、  
いろいろな方法で  
「外に開かれた」プログラム。

## OPEN 講座のしくみ

さまざまな人とのコミュニケーション機会をつくり、  
人とのやりとりからの気づきや学びの発生を促進する。  
自ら主催するばかりでなく、地域内の他団体と協力したり、  
参加の立場を変えることで、学びの形を増やす。

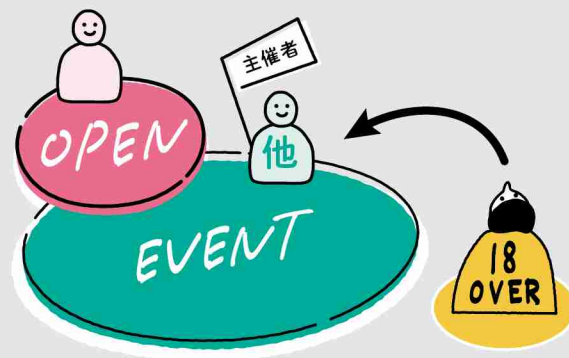
### A おもしろそう！を きっかけにしてみる (外部からの参加をうながす)

年齢や障がいの有無に捉われずに興味  
関心が高まるような企画をつくり、  
「おもしろそう！やってみよう！」を  
きっかけにしたコミュニケーション  
機会を創出する。



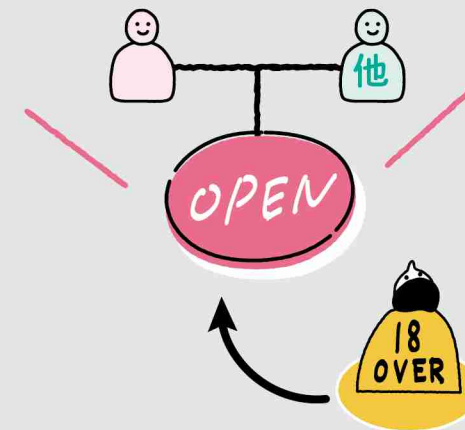
### B 他団体主催の イベントに乗っかってみる

地域の他団体が開催するイベントへの参加をプロ  
グラムの一つとして考え、  
自分たちにはないネットワークによる、異文化・  
異分野にいる人との出会いやコミュニケーション  
機会を創出する。



### C 他団体と協働して プログラムをつくってみる

プログラムづくりに他の視点や目的意識を  
加えることで、テーマに広がりをつくり、  
多様な学びの機会を創出する。



### D 立場を替えてプログラムに かかわってみる

プログラムを受ける側ではなく本人たちが講  
師となる、運営スタッフになる、ボランティ  
アスタッフになるなど、立場を替えてプロ  
グラムにかかわる機会をつくることで、  
新たな役割がもたらす心持ちや行動の変化に  
よる学びの機会を創出する。



## OPEN 講座のコツ

● 自分たちの思いと同様に、相手の思いも大切にする

● 楽しむことと、真面目にやることを両立させる

● 外に出ることをこわがらない

● できあがったプログラムをアップデートする意識を持つ

● 「参加」という形にこだわらない



**おしゃべりなからだ**

日時：7月7日(日) 13:30～15:00  
 会場：i-LDK 参加者数：45名  
 講師：砂連尾理(振付家、ダンサー)



参加するのが  
 楽しかったです  
 ありがとうございます

とてもおもしろかったです。

**科学実験教室**

日時：9月29日(日)  
 13:30～15:30  
 会場：i-LDK 参加者数：46名  
 講師：小沢洋一  
 (あなたの社会福祉事務所へアゴラへ)

またきま



**会話する音**

日時：7月7日(日) 16:30～18:00  
 会場：i-LDK 参加者数：45名  
 講師：片岡祐介(音楽家)



**ペガーパーン体験会ボランティア**

日時：10月20日(日) 12:00～17:00  
 会場：早稲田大学 参加者数：約150名  
 主催：早稲田大学稲門祭実行委員会・  
 一般社団法人日本ペガーパーン協会



### おにぎりワークショップ

日時：12月1日(日)  
11:00～13:00  
会場：i-LDK 参加者数：72名  
講師：神津聖ほか  
iLDK 実行委員会メンバー



### 続・選挙に行くって そういうことか！

日時：1月18日(土) 15:00～16:30  
会場：Coconeri 産業イベントコーナー  
参加者数：46名  
講師：練馬区議会議員6名



# CLOSED 講座

当事者が自分たちで選んだテーマを  
深掘りしながら  
学びを深めるプログラム。

- 自主活動 A わたしのトリセツ
- 自主活動 B リアルおままごと

### つながるフェスタ 2020

日時：2月1日(土)  
11:00～16:00  
会場：Coconeri ホールほか  
参加者数：41名  
講師：練馬区協働推進課



## CLOSED 講座のねらい

障がいのある人たちの自主性を重視したプログラム。  
本人たちがテーマを決め、ファシリテーターたちとディスカッションをしながら、プログラムをつくっていく。プログラムを受けるのではなく、つくる作業をすることで、テーマや、関連するものごとについての気づきや学びが生まれることを促す。

## CLOSED 講座の「コツ」

### ● 当事者の意見を大切にす

日頃から当事者の発言やアイデアがしやすい環境を整え、それをしっかりと聞き、その真意や思いを理解する。また理解にとどめるのではなく、企画として立ち上げる際に会話の機会をつくり、本人の意向とズレがないかを配る。

### ● 日頃のやりとりや雑談などにヒントがある

普段のやりとりや雑談の中から、社会生活に関する不安や苦勞などに気付けるようにする。そうした気づきについて、折に触れ会話の機会を持つことで、CLOSED 講座として実施できそうなアイデアを蓄積する。



自主活動 A

### わたしのトリセツ

(平成30年度「しごとの意義」からの展開)

開催日：7月21日(日)、9月14日(土)、  
10月6日(日)、11月17日(日)、1月19日(日)、

〈ファシリテーター〉

川口淳一 (作業療法士、結城病院リハビリテーション科科长)

坂本文武 (一般社団法人 Medical Studio 事務局長、  
社会情報大学院大学 広報・情報研究科 教授)

鈴木一郎太 (株式会社大と小 レフ取締役、  
静岡県文化プログラム・コーディネーター)

昨年度の「しごとの意義」を考える講座から、さらに実践への適応を意識した活動。

しごとは誰かとする協同作業。自分を客観視すること、自分の特性を説明できることを念頭に、コミュニケーションツールとしての「トリセツ」をつくってみる活動です。周囲の人に知ってほしい項目を書いてみて、仲間や職場の同僚との対話を通して加筆する過程を経ました。コミュニケーション技術を高めるツールになりうる可能性を確認できたものの、「トリセツ」という名称が持つ誤解や知ってもらおうという一方通行な感じが、今後の改善点として指摘されました。



自主活動 B

### リアルおままごと

(平成30年度「成果報告会」「人間・性と生」からの展開)

開催日：11月17日(日)、12月8日(日)、  
1月5日(日)、1月19日(日)

〈ファシリテーター〉

柏木陽 (演劇家、NPO 法人演劇百貨店代表)

昨年度実施したCLOSED 講座「人間・性と生」からの発展と、成果報告会で当事者から寄せられた結婚生活に関する疑問が契機となり、派生した活動。

昨年度実施したCLOSED 講座「人間・性と生」からの発展と、成果報告会で当事者から寄せられた結婚生活に関する疑問が契機となり、派生した活動。「みんな結婚に夢を抱いているけれど、実際はいいことばかりじゃないんじゃないかと思う。自分は知らないですが、いいことばかり見ているのはよくないんじゃないかと思えます」という発言の後、おままごとのように、少し体験できるようなプログラムをやってみたらどうか、との提案があった。

参加者との話し合いから、恋愛観や結婚観について具体的なプランが出来上がっている人から、まったくイメージができない人まで、かなりのばらつきがあることがわかった。恋愛編と結婚編をわけて実施することとし、今年度は恋愛に焦点を絞った。告白する人・される人にわかれ、疑似告白するというロールプレイを通じて、恋愛成就させるためにどんなことができるか、グループでのディスカッションを促すカードゲームが作り出された。その光景は、さながら休日のカフェで交わされる恋愛相談のようでもあったが、まっすぐ発せられる言葉は、時に相手の気持ちを置き去りにしてしまいがちなことが浮きぼられ、それに客観的に気付く様子が見られた。





## 学びの結果えられるものは「正解」ではなく「問い」である

より複雑に、より不確実になってきた現代社会。過去の正解や成功体験が、未来の確実さを担保しない時代だから、「学びを棄却」したり「学びほぐし」て、新しい「何か」を生み出す「考える力」「問いをたてる力」を養う必要がある、と社会教育の力点が移動してきました。

大学入試も「考える力」を問いかける制度に移行します。企業内教育も、論理的思考やシステム思考、さらにはデザイン思考と呼ばれる合理的で理性的な思考法から、アート思考など、創造的で感性的な思考法に主軸をすでに移しています。

何が正解か分からない時代の学びは、ある意味「他者との違いから学び、実践と学習の往復運動から深めていく」社会教育の本質にいま一度近づいてきているのかもしれない。人は死ぬまで内的成長を続けることができる、という社会教育の信念は、人生100年時代の日本に「学び」の意味と方法をもう一度考え直すことを要求しています。「学び」をもたらず多様性の源泉に、障がいを持つ人たちに光が当たることも、当然の流れとも言えます。

これほど個別化・多様化している社会では、一斉教授の知識伝達型の教育には一定の限界があることは認めざるを得ません。社会教育は本質的に次のような呼びかけをしてきました。学びは強要されるものでなく、義務でも苦行でもない。「ちゃんと座って」教室であるものとは限らないし、「偉い人」がいないと成立しない

**坂本文武**（一般社団法人 Medical Studio 事務局長、社会情報大学院大学 広報・情報研究科 教授）

社会課題を解決する人と組織の相談支援が専門。NPOの経営支援や企業の社会的責任（CSR）、広報のコンサルティングをてがける。2010年から立教大学特任准教授、2017年から社会情報大学院にて教鞭をとる。2012年から医療専門職のまちづくり教育にも関わる。自治体の市民協働や地域福祉の行政委員や研修講師を多数務めてきたほか、地域共生社会に係る厚生労働省の委員や研究協力者を務める。

わけでもない、と。「プレイフルラーニング」、楽しさの中に学びの本質がある、という概念が台頭しているのもその象徴かもしれません。

日常生活から生じるさまざまな疑問をもとに、ごちゃまぜの非定形の学びの場の社会実験をしてきた「学びの会」のありさまを、AI（人工知能）を研究する情報学者からは、「教え教わるのではなく、みんなが平等な関係の中で何かを創っている」と分析します。いまでいう「アクティブ・ラーニング」をさらに深化させた、偶発からの創造であり、場の目標や正解に囚われていない価値を指摘しています。臨床教育学の専門家は、愛知県や鹿児島県で30年来つづく新しい社会教育の挑戦に並ぶ重要性を指摘したうえで、学びの本質である「個性性と協働性の両立」が図られつつあることに着目をして期待を寄せています。個の疑問や好きなことから発した問いが「協同学習」に類する不定形の相互作用により、そこに関わる人の視野を拡げたり、視座を高める効果があるのではないかと。

「問いにあふれている」（前述の情報学者）「学びの会」の研究実践事業は、大学でも企業でもできていない社会教育の最前線であり、本質なのかもしれません。そして、ここで実践されている「学びの場」が、地域のさまざまな団体と手を取り、地域のあちこちに点在するようになったら、まち全体がもっとワクワク、イキイキとする期待を抱かせます。

これまでの  
実践研究事業で  
手ごたえが  
見えてきた手法を、  
福祉施設や  
居場所事業の場など  
様々な機会を活用して  
展開させた。

## 応用編 実践に反映させた事例



いらっしやい!

# しゅんしゅんの お好み焼き屋さん



お好み焼きが大好きで、はじめは焼く時に手伝うくらいだったが、そのうち買い物に行って準備をし家族分をつくるようになった。お父さんの出張時や、お母さんが体調の悪い時などに家事を助けるという気持ちがあることが、本人のコメントからも伺える。

「モアタイムねりま」※1の仲間やスタッフにふるまったり、「i-LDK」※2のイベントで作り方を教えはじめたところ、ワーキンググループメンバーの森口弘美さんからの誘いで当団体とともにイギリスでの交流プログラムに参加。そこで活動紹介（お好み焼き屋さん）や、ふるまいも行う。帰国後、交流プログラムで一緒だった方からの提案で、武庫川女子大学の授業でも紹介される。

偶然的展開とも言えるが、本人が考え、試行錯誤している姿が、「学び」の本来の意味を体現しているようでもあり、こうした展開を引き寄せた大きな要因のひとつであると考えられる。

※1モアタイムねりま/月曜～金曜、9:30～15:30(放課後～17:00)当法人が運営する障害福祉サービス自立訓練(生活訓練)事業所。  
多彩なプログラムと個性派ぞろいのスタッフ陣が、仲間とともに主体的に生きるチカラを育もうとする人たちに応援する、学びの場。

※2 i-LDK(アイエルディーケー)/月曜～金曜、17:00～19:00、土・日・祝日 12:00～18:00  
☆いずれも不定期のため、ホームページでご確認ください。  
モアタイムねりまの空き時間を使って、当法人が運営する自主事業。障がいのある人だけでなく、だれでも利用することが可能で、それぞれが気の向くままに自由に活用することができる学びの場。知的障がい当事者メンバーによる実行委員会が主体となり、イベントを企画開催したり、フリースペースとしての場を提供している。



モアタイムねりまの調理学習で、お好み焼きを提案し担当になる。スタッフ含め全員分を作り、とてもおいしいと高評価! みんなに喜んでもらったことを嬉しく思っている。

i-LDKの自主企画として、お好み焼き屋さんを提案。「みんなに喜んでもらいたい」

〈準備段階〉  
参加人数から材料を概算、参加費を決める。チラシづくり、企画実施時の説明資料をパワーポイントで準備する。

〈実施時〉  
20名の参加者にむけて焼き方の手順を説明。わかりやすさを考え、ひっくり返すところは動画を使用。

〈事後コメント〉  
みんながこんなに早く作り方を覚えてお好み焼きを作るとは思いませんでした。みんなが失敗しないように色々回ってみるのが大変でした。またやりたいです。

基本的にプロジェクトは英語で進むため、趣旨がよくわからない様子。  
「時差ボケ」を体験したことに、感動のような驚きを示す。

イギリスならではの文化(赤信号でも渡る)や食べ物(フィッシュ&チップ、ホテルの朝食に米がない)、物価(水の値段が高い)、鉄道に興味を示す。

チームの一員としての自覚が生まれていた。

親戚に不幸があり、葬儀がプロジェクト初日と重なってしまった。しかし「プロジェクトに穴をあけるわけにはいかない!」と、はじめの2日間は一人だけで参加することを志願する。

住んでいる土地ではないが、鉄道と道に強い特性を活かし、すすんで道案内をする。

セミナーにて、英語の絵コンテを使いお好み焼きの活動を紹介。お好み焼き模型を作り、ひっくり返しの練習エリアをつくる。うまくひっくり返せると、「GOOD JOB!」と英語でリアクション。

みんなに、作って楽しい・食べておいしいというお好み焼きの魅力を伝えられて大満足の様子。

イギリスチームのイアンさんが自分と同じ当事者であると気付く。(後日、彼の生い立ちを知って、たいへんだっただろうと感想を書いている)

天理大学の副学長さんらと話をした際、堂々と自分の感じたことを伝えていた。(表紙裏に掲載)

後日、女子大生からたくさん感想が送られてきて、「大量のラブレターみたいだ～」と大喜び。普段は感想文やコメントを求められてもそっけないが、この感想には一人一人に丁寧に返事を書く。

〈事後コメント〉  
こっちに来て話させませんか? と言って嬉しかったです。Belongについて考えました。話し合いの中で「愛」「時間」「居場所」「関係」「自然体」などありました。

〈事後コメント〉  
Q. この1年間でまなんだことは、なんですか?

ロンドンや大阪に行って良かったと思いました。ロンドンにはお米がなかったり、お金が違ったり、日本には英語の表示があるのにロンドンには日本語の表示がありませんでした。

大阪では、自動販売機のジュースが安かったり、言葉が違う所がありました。

色んな所が違って面白かったです。

## 練馬区教育委員会 夏季集中講座 講師

日時／2019年8月2日(金)

会場／練馬区学校教育  
支援センター

参加者数／63名  
(うち教職員49名)

主催／練馬区教育委員会

未解決のまま、心の中に  
置き去りにになっていることがある。  
昨日のこのように  
鮮明に思い出される。  
〔事前学習〕での当事者の姿から

### 参加者の事後感想

- ・これまで教え子たちの卒業後を意識したことがあまりなかったが、今回の講義を受け、卒業後を見据えた教育をしていきたいと思いました。
- ・実際のお話を伺うことができ、人としての原点を改めて感じることができました。
- ・卒業後の進路先だけでなく、さらに長期的な視野を持って保護者や児童に支援していきたいと思いました。
- ・子どもの話をもっともっとよく聞くこと、自分で決めることの大切さをいつも念頭に置いておくようにしたいです。
- ・企業就労の現実も知りました。
- ・みなさんの表情から、毎日充実して学ばれていることがよくわかりました。

### 事前学習による当事者の発言「学校のころを振り返って、先生に言いたいこと」

- 先生はきっちりし過ぎ。もっとユニーク、ユーモア、サービス精神旺盛になってほしい。
- いじめられた方にも責任があるって言う。和解しないままに卒業したので、今でも思い出して拒否反応が出る。
- 障がいのあるなしで差別する。すぐできる人の方へ行く。
- 先生は話を聞こうとしない。逃げる。面倒くさがる。自分で解決しない。
- 態度が悪かってペンで頭をたたかれた。なんでなぐるのか知りたい。暴力はいけない。
- 説明してくれない。
- 先生が机をけた。反抗期みたい。ガキかよ！
- 「早く」って言われるのがいやだったのに、何度も言われ、パニックになっても理解してもらえなかった。
- 「音を立てて食べるな」ってよく言われたけれど、あごの状態が悪くてできないのに理解してもらえなかった。

### テーマ

卒業後を見据えた特別支援教育のポイント  
～ 自立ってなんだろう？～

### 概要

特別支援教育を担う教職員は、生徒の発達課題と学習ニーズを把握し、内容をわかりやすく伝える多彩な工夫ができるといった高い専門性が必要であると考えられるが、必ずしもそうとは言えない現状がある。また、練馬区内の小中学校特別支援学級で教育を受ける生徒たちは、そのほとんどが東京都立特別支援学校高等部に進学しており、生徒たちが学校終了後にどのように社会に移行し、どのような生活をしているかなど、練馬区の教職員が社会における当事者の状況を把握しづらいことがある。

そこで教職員が、卒業後に地域社会で暮らしている当事者と交流できる機会を創出したいと考えた。練馬区教育委員会の協力を得て、教職員向け夏季集中講座にて当事者が講師を務めるという形をとった。一方的に話を聞くだけではなく、当事者とのグループディスカッションを通して、当事者が学校教育を振り返って思うことを共有しながら、教職員があらためて「自立」や「学び」について考える機会となった。

### 講座の流れ

- ① 障がい児・者を取り巻く社会的課題について説明  
またその解決に向けた取り組みを紹介〈代表理事〉
- ② 当法人の自主企画について説明  
地域の中で主体的に生きていこうとする当事者の姿から、あらためて「自立」について考えてもらう〈当事者〉
- ③ 「自立＝就労」というイメージが根強いいため、  
就労先での厳しい現状を知らせる〈当事者〉
- ④ モアタイムねりま(生活訓練事業所)で学んでいることの紹介〈当事者〉
- ⑤ 当事者の発言をもとにグループディスカッション



# 超 大学

年齢、性別、社会的立場などにしばられず  
テーマについて自由に発言し、  
さまざまな角度から考察する機会を  
それぞれの中に生み出す会議。

## 静岡大学編

大学生との「超大学」の実施が、障がいのある人の学びの機会となり、さらに大学生にとっての学びともなりうるかを考えるために開催。

障がいのある人たちにとっての「大学」という場所や大学生は、憧れであったり、関心を持つ対象であることがよくわかる機会となった。「大学生に聞いてみたいことがあります」という前置きで質問を投げかけたり、大学という選択肢が自分にはなかったと訴える人がいたり、反応にはもちろん個人差はあったが、前のめりな発言が多かった。

一方、障がいのある人たちとの接点をほとんど持たない大学生にとって、彼らと会話すること自体が初めての経験で感じ入るところもあったようであった。しかし、それ以上に彼らからのまっすぐな問いかけは、“障がいのある人からだから”ということは一切関係なく響いており、翌日の授業まで尾を引いて話題に上がるほどであった。

障がいのある人たちと大学生に加え、複数の社会人がいる環境が、「超大学」を成り立たせる参加メンバー構成であることがわかってきた。

日時：2019年9月4日(水) 13:00～16:00

会場：静岡大学

参加者数：17名



## 企業関係者編

「超大学」が、“企業でも通用する学びのしかけなのか？”を考える会を開催。

特例子会社の経営者の方々や人材育成で企業とつながっている福祉・医療関係者といっしょに「超大学」を体験した。企業活動に関わってきた人でも何かに気づき、自らに問いかける姿勢を参加者に見出すことができ、超大学が企業でも学びの効果を発揮する可能性を見出された。一方で、参加する当事者たちの学びにつながるより深まりのあるデザインが必要なこと、「超大学」が機能するための前提条件があるかもしれないこと、企業活動の一部にするためには、「超大学」の意義を可視化する必要があること、といった課題も見出した。

日時：2019年12月10日(火) 18:00～20:00

会場：Coconeri (ココネリ)

参加者数：15名



# 地域内 連携

地域内で実施されている社会教育プログラムの主催団体たちと、地域全体を見渡した時、受益者である障がいのある人たちにとってよい環境となっているか、改善していくためにどのような連携が可能かなど、情報共有と意見交換を実施。

# 練馬区における知的障がい者の生涯学習に関わる関係者交流会

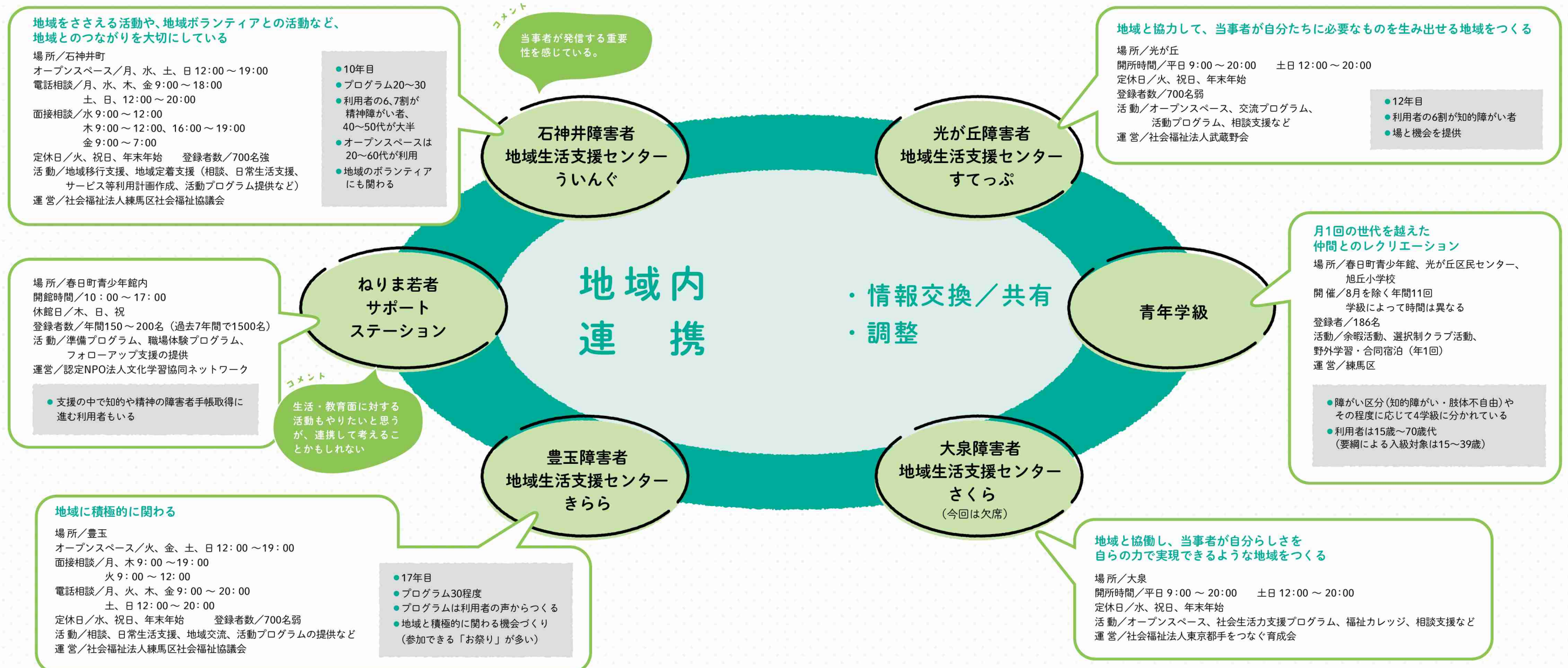
日時：2019年11月15日(金) 13:30-15:30 場所：春日町青少年館

参加者  
 青年学級……菅野 昭浩 (春日町青少年館副館長)、山下洋之 (春日町青少年館職員)  
 地域生活支援センターういんぐ……所長 益子 憲明 (社福) 練馬区社会福祉協議会  
 地域生活支援センターきらら……所長 菊池 貴代子 (社福) 練馬区社会福祉協議会  
 地域生活支援センターすてっぷ……所長 石野 哲朗 (社福) 武蔵野会  
 ねりま若者サポートステーション……所長 田中 亮太 (認定 NPO 法人文化学習協同ネットワーク)  
 大森 梓 (NPO 法人障がい児・者の学びを保障する会代表理事/当事業コーディネーター)  
 永田 三枝子 (NPO 法人障がい児・者の学びを保障する会理事/ MoreTime ねりま施設長)  
 坂本 文武 (一般社団法人 Medical Studio 事務局長、社会情報大学院大学 広報・情報研究科 教授・当事業ワーキンググループ座長)

昨年度、当事業コーディネーターは練馬区内において、「障がい者の社会教育」と言える社会資源について調べ、個別に視察を実施した。その中で「選挙」「防災」など、いくつかのプログラムでテーマが重複してしまっているのがあった。また、それと並行して当会のプログラムに参加していた当事者から、他機関のプログラムと日程が重なってしまっていると指摘されたこともあったため、関係者間での調整が必要だと感じた。

と考へ、今年度は関係機関間で意見交換する機会をつくった。加えて、こうした意見交換の場に当事者が不在ということが多く、練馬区においても障害者支援計画の策定に大きくかかわる自立支援協議会や障害者計画懇談会などの会議に、知的障がい者は委員等としての参加はない。こうした現状を踏まえ、当事業のワーキンググループでは知的障がい当事者をメンバーとして位置づけ、ともにプログラムの検討を行ってきた。この関係者交流会も、次年度からは知的障がい当事者も参加メンバーになる会議体として継続していく。

当事者がより多くの選択肢を持ち得るためには、関係機関同士が情報交換・共有していることが非常に有効である



# ディスカッション

## 意見交換

障害者地域生活支援センター4施設間でのプログラムや利用者の情報共有はできているので、必要に応じて特定利用者のフォローなどもできるが、福祉・教育といった所管をまたいだ連携はとりづらい現状がある。

2年に1度発行される「障がい福祉のしおり」はあるが、公的サービスのみの掲載にとどまっており、選択肢となりうる地域資源を網羅しているとは言えない。

障害者地域生活支援センターのプログラムは、利用者の要望に応じてつくられるため、4施設それぞれで違う。

各障害者地域生活支援センターに地域資源のある程度の蓄積がある。

特別支援学校の高校2、3年は障害者地域生活支援センターにつながる仕組みがあるが、小・中学生くらいから地域連携があるといいのではないか。

青年学級は、学級生が自主的に退級するまで在級できるため、高齢化が進んでいる。

青年学級は、事務局に専門性を有する職員がおらず、また活動内容も余暇的なプログラムにとどまり、社会教育的な視点で取り組めていない現状がある。

## 今後のこと

複数の施設を並行して利用している人も多く、教育と福祉をまたいだ関係者交流会は、当事者にとって有益であると言え、今後も継続して開催していきたい。

情報共有に加え、実践報告を兼ねることでプログラムのアップデートやスタッフのスキルアップなどの効果が期待でき、地域全体として学びをバックアップできるのではないか

当事者が参加できるようにしたり、新たに関心のある団体に参加を促していくなど、開かれた会としたい。



## おわりに

「あずさんは、どこでもドアのような人です」  
ある仲間が、わたしのことをこう紹介してくれました。

《知的障がいがあるとされている人たちは、家と職場だけなど非常に限定的な場で暮らしていることが多くあります。この活動をきっかけにして、これまでにない新しい経験がたくさんできたことで、わたしを「どこでもドア」と例えてくれたのだろうと考えています。》

「なんて素敵な表現なんだろう」と光栄に思うと同時に、わたし自身にとっても彼がどこでもドアのように思えました。  
それは、彼やいわゆる知的障がいがあるとされている仲間とのかかわりによって、私自身が大きく変化していたことに気が付いたからです。それは、まるで本来の自分を取り戻し、新しい世界を生きているような感覚でした。

これまでの自分は、こどもの頃に教え込まれた「当たり前」や「正解」について、それらが間違っているかもしれないと疑ってみたり、あらためて考えてみるということもありませんでした。また、自分が物事について考えるときには、「一般的には」とか「常識的には」といった観点から導き出された正解らしきものを、自分の考えなのだと思い込んでいました。

彼らの存在に、わたしはいつも「それは本当のあなたなのですか？」と問いかけている気がしていました。そして、「自分とは何者なのか」ということを考えるようになっていきました。

こうして徐々に自分というものを取り戻していくと、「あれ？」という違和感、「え、なんで？」という問いが、日常のあちこちに存在していることに気がきます。  
きっとこうした感覚は誰もが暮らしの中に持っているのではないかと思います。でも、「そんなこと今更考えるまでもない」とか「考えても仕方がない」と、これまでのわたしのように知らず知らずのうちに蓋をし、気付かなかったことにしてしまっているんだろうと思います。  
わたしはこの「自分感」を取り戻せるようになったおかげで、自分が自分で自分を生きているという感覚を強く持つことができるようになりました。

みちばたに咲く花を見て、「花は綺麗なもの」と人から押し付けられた感覚を思い出していただけた自分が、自然に足を止め、「わあ、きれいだなあ」と心から湧き出る想いを感じられるようになっていることを、なんて素敵なことだろうと思うのです。  
そして、それがどんな想いであろうとも、「そうだね」とありのままに受け止めてくれる仲間がそばにいてくれることで、「いま、ここに自分が生きてるんだ」と実感できるからこそ、わたしがこの活動を自分事として続けているのだろうと、そう思っています。

NPO 法人障がい児・者の学びを保障する会 代表理事 大森 梓

ソース香る

# 成果報告会

日時：2020年2月5日(水) 14:00～17:00

会場：coconeri (ココネリ) 3F 産業イベントコーナー 参加者数：68名

## 当日プログラム

- 1 文科省 GO あいさつ
- 2 2019年やってきたこと報告
- 3 超大学をみんなで体験

当事業に参加していたメンバーが、それぞれの得意なことを元に、体験型のメニューを開発。それぞれのブースで来場者を迎えて、講師をつとめた。

- A** しゅんしゅんのお好み焼キング
- B** なっちゃんのカップケーキやさん
- C** 手作りスゴロク ～夢に向かってGO!～
- D** 文化・教-YO!  
D-1 16文字クイズ D-2 「なす」の絵本づくり
- E** 静大生とディスカッション

## 4 シメトーク

1年の報告、体験を通して、それぞれの専門性の観点から感じたこと、そしてそこに「学び」があるか、あるとすればどんな可能性が考えられるかを探った。日常の中で偶然起こるいろいろな出来事をチャンスととらえて、学びの機会をつくりだしていることに言及いただいたり、ハードルを下げるために名称に気を配るなどのアドバイスをいただいた。

ゲスト / 田中孝彦さん (日本臨床教育学会会長)

桐山伸也さん (静岡大学情報学部准教授)

司会 / 坂本文武 (当事業ワーキンググループ座長)

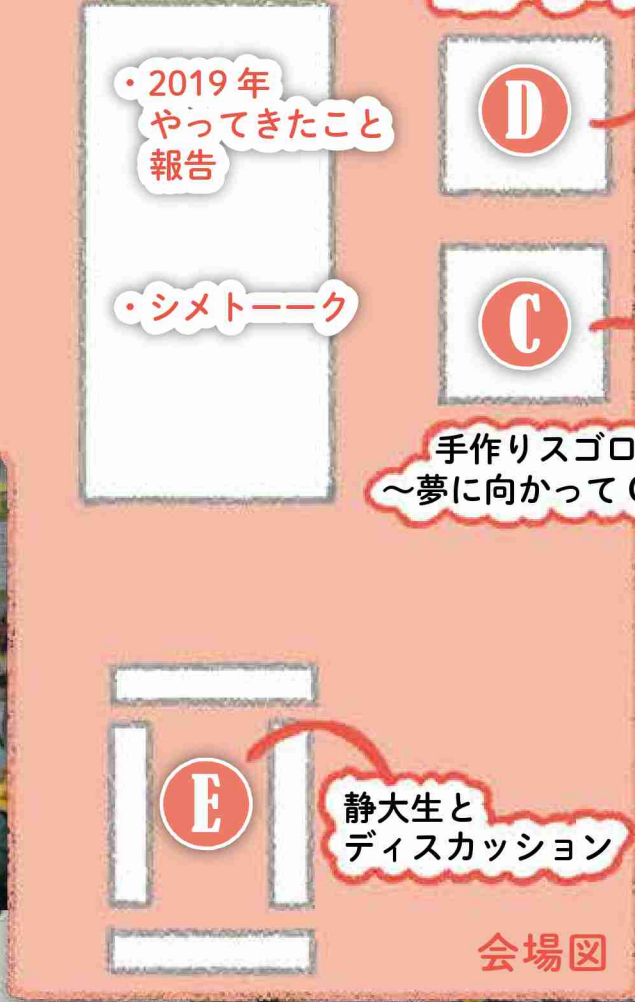


なっちゃんのカップケーキやさん

文化・教-YO!



しゅんしゅんのお好み焼キング



2019年  
やってきたこと  
報告

シメトーク

手作りスゴロク  
～夢に向かってGO!～

静大生と  
ディスカッション

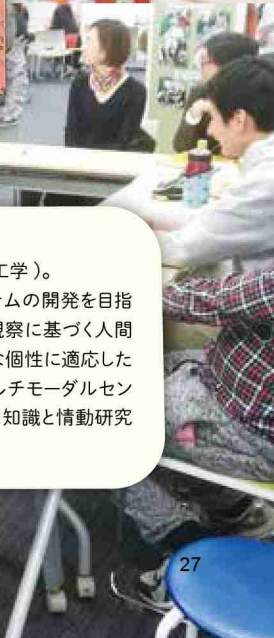
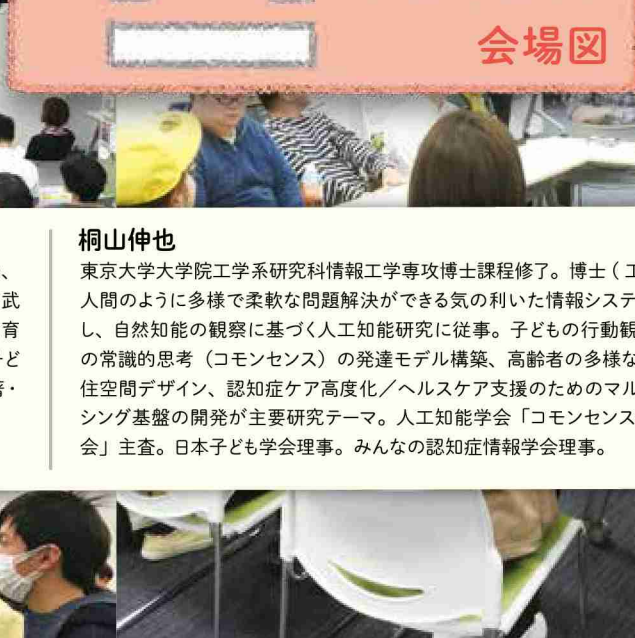
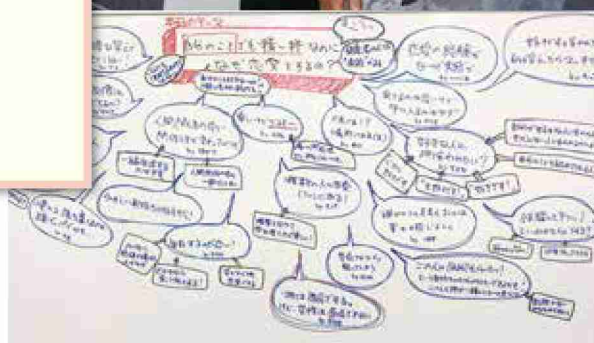
### プロフィール

田中孝彦

東京大学大学院教育学研究科博士課程修了。東京大学、東京経済大学、北海道大学、都留文科大学を経て、武庫川女子大学教授を退官。専攻は教育思想、臨床教育学。主な著書「人が育つということ」「生き方を問う子どもたち」(岩波書房)、「創造現場の臨床教育学」(共編著・明石書店)など多数。

桐山伸也

東京大学大学院工学系研究科情報工学専攻博士課程修了。博士(工学)。人間の様に多様な柔軟な問題解決ができる気の利いた情報システムの開発を目指し、自然知能の観察に基づく人工知能研究に従事。子どもの行動観察に基づく人間の常識的思考(コモンセンス)の発達モデル構築、高齢者の多様な個性に適應した住空間デザイン、認知症ケア高度化/ヘルスケア支援のためのマルチモーダルセンシング基盤の開発が主要研究テーマ。人工知能学会「コモンセンス知識と情動研究会」主査。日本子ども学会理事。みんなの認知症情報学会理事。



# みんなの声

楽しかった、  
続けられるといい

## 成果報告会に 参加した障がいのある人たち

ちょっと勉強できて、  
交流もできて良かった。  
ダメ出しにはイラっとしたけど

午前はお手伝い楽しく、  
午後は女子大生いて緊張した

親として将来の考え方が  
ひとつ見えた

スタッフさん側をやってみたいと思っ  
た。各々の個性を活かして「創造する」こ  
とは止めなければ続く。大人やかんきょ  
うが「ひらかれた場やキカイ」を彼らに示  
しているつもりが、いっしょにつれてっ  
てもらってるのかも？

つくる=学ぶ、本当にそうだと思います。  
それはみんなに通じる事で、  
大切なことだと思いました

## 成果報告会に 参加した一般来場者

イベントがあって最高でした。  
軽井沢でみんなといろいろ体験したら  
楽しかったです。  
メイクアップ講座で  
先生やったの初めてでした

学びは、人と、人が、繋がって、  
障害有り無しに、関係なく、  
心から、好きなことを学べました

ケーキ屋さんを体験してくれた  
人が楽しそうで、  
企画した側として嬉しかった

みんながやっている姿がすごかった。  
それをみれて良かった。がんばってよかった

学びって色々あると思うんですけど、一番は何  
かに没頭することかなーと思いました。没頭し  
たものは得意になりますし、主体的な状態です  
し。それが最終的に人に何か貢献できた体験に  
つながるととても幸せなことだなと思いました  
。没頭できるのを見つけるのは簡単ではない  
んですけどね (^\_^)

自分でワークショップを企画したり、  
それをまとめて発表していて驚きました。  
みなさんがとても楽しそうで  
生き生きしていたのが印象的でした

## プログラムに 参加したメンバー

平成31年度  
「障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究」

社会（地域・福祉・企業の連携システム）が支える、  
学校教育終了後から生涯にわたる継続的な学びの実践研究事業  
～コミュニケーション経験を基盤とする生活・就労支援プログラムの構築～  
報告書

## 続 Zoku

発行日 2020年3月6日  
発行者 NPO法人障がい児・者の学びを保障する会  
代表理事 大森梓  
住所 東京都練馬区高松2-15-18  
E-mail hello@npo-manabinokai.com  
ホームページ http://npo-manabinokai.com

## NPO法人障がい児・者の学びを保障する会

大森梓	永田三枝子	栗林満
永野佑子	尾崎貴哉	住吉玲以子
齋藤恵里子	山下洋児	工藤高栄

## ワーキンググループメンバー

笠原千絵（上智大学総合人間科学部社会福祉学科准教授）  
片岡祐介（音楽家）  
坂本文武（一般社団法人Medical Studio事務局長、  
社会情報大学院大学 広報・情報研究科 教授）  
鈴木一郎太（株式会社大と小とレフ取締役）  
田中真宏（NPO法人ピープルデザイン研究）  
森口弘美（天理大学人間関係学科社会福祉専攻准教授）

編集 鈴木一郎太（株式会社大と小とレフ）  
デザイン ウエダトモミ（BOB. des'）

## NPO法人障がい児・者の学びを保障する会

障がいのあるこどもを持つ親たちが学び合う場「ままのがっこ」での3年の活動を経て、2017年11月にNPO法人障がい児・者の学びを保障する会が発足。保護者、元教員、福祉関係者、弁護士、研究者などで構成される理事メンバーが、知的障がいのある当事者を中心に、様々な学びの機会を創出する活動を展開している。

## 理念

NPO法人障がい児・者の学びを保障する会は、様々な学びの機会づくりを通して、誰もが人との関わりの中かで、発達と学習ニーズに合わせて学べる教育を創造し、豊かな選択肢があり、自分らしく生きられる社会の実現をめざします。





すまいるさん 🧐 一生学びなんだなあ。まりを 一

場所：coconeri(ココネリ)

2月7日 20:41 ・ 東京都 練馬区 🌐

2019 夏季集中講義アートマネジメント各論の授業で実際に体感し、衝撃を受けた「超大学」の  
成果報告会とディスカッションに参加してきました 🌟 ていーのちゃんと 🚫

障害の有無や年齢、立場、性を超えて1つのテーマに対してディスカッション 🗣️

もちろんファンリはいませんし、脱線しまくりですし、沈黙もあれば、めちゃくちゃ盛り上が  
ってしまう時もある笑

答のない問いに対し、その場を共有する人と考え続ける場。であり、ひとりひとりの学びの  
場でもあるのかなと。

(🧐 みんな本当これ体感してほしいです笑)

その場では確かに " 学ぶ " が平等に存在している気がして。

"何かを得よう" という意識が個人にあるような。

その場に存在する人と自分との共通点を発見したり、探したり。

「私だったらこう考える」と相手の立場になって想像し、考えたり。

それでも価値観も環境も違うから異なる意見ももちろんある。だからそこで人の話を

聞かずに批判や否定するのではなく、いったんまずは認める。

その人の存在を認める。感じがしました 🗣️

👍 立場やいろんなカテゴリーを超えて繋がっていく思考の面白さ。

これはストパラの身体表現時や普段の話し合いにも感じてる。

(1人でも面白いけど他者も入る事でぐんぐんと世界が広がって🌐)

ひとつのアイデア 🌟 に刺激を受けて他者が触発され、別の新たなアイデアもしくはそれに  
繋がるアイデアが発生する。

そう。ぼんぼん現象 !!

一誰かを好きになる。恋をする。

それは私にとっては自然現象ぐらい当たり前で普通で。自分にとっての当たり前って

実は他者からすれば全然当たり前ではなくて。当たり前だったコトの "そもそも" の根本。

深い部分を掘り下げていくような感覚。

そこから分かるのは恋愛を超えて見えてくるもの。思考が停止したり、急展開したり。

まるでジェットコースターみたいなんだ 🎢

「普通」って? 「当たり前」って? なんだ。常識って? なんだ。どこから形成されたのだ。

大学に行くとその背景を学ぶ事ができる。

人はなぜ恋をするのだろうか

ここでの学びは一方方向からの学びではなくて、人と人の関わりからの学び。

学びって日常にこそあるのだと思います。何気ない会話や何気ない行為からも。

そして何気なく日々を生きる街にも。

学びを発見しに行く。

そこには、どんな場面でも自分から面白い姿勢が大切なんじゃないかなあと。

きっとその姿勢の違いで同じ時間を過ごしても、インプットの質の差が生まれると思う。

常に自分で考え、対話し、実践。

そこには気づきや発見も含まれていて。

その繰り返し 🔄

さらに他者の存在により別の世界へいくこともできる。

外に開くコツの1つに " 立場を変える " 🌟 🌟

なるほど ...。どこか無意識に私達は生活していく上で立場という目には見えないモノに  
縛られているような。

いろんな人が関わられるような関わりしろの仕組みをどのようにつくっていくか。

開いていくか。

優しさってなんだろうなあ。

🌟 学ぶこと。生きること。表現すること。

まともはありません! 笑

また遊びに行きますし、ぜひまた静岡にも遊びに来てください!! はやく会いたい!

居心地最高 ~ 🌟 わーい 🧐 🗣️

お好み焼きもカップケーキ 🍷 も最高に美味しかったです 🍷 🍷

<成果報告会に参加した“すまいる”さん(静岡大学3年)の facebook 投稿より>

いいね!

